

Title	「白猿伝」の系譜
Sub Title	The genealogy of 'The white monkey' legend
Author	成行, 正夫(Nariyuki, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1974
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.33, (1974. 2) ,p.64- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00330001-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

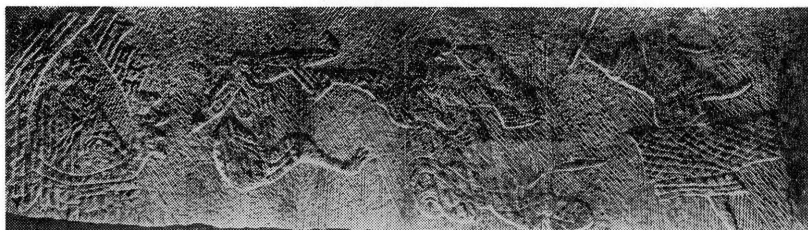
「白猿伝」の系譜

成 行 正 夫

唐代伝奇の「補江総白猿伝」は、猿が人間の女性を奪う物語の最も代表的な作品である。「補江総白猿伝」にはその原形となる伝承があり、後世には又その流れを汲む類似の小説のあることは、早くから指摘され、注目されてきた⁽¹⁾。それらの文芸作品と現代の民間説話とから、白猿伝説の背後にある民俗について研究したものに、直江広治氏の示唆に富む研究がある⁽³⁾。ここでは、新しい資料などを挙げて、白猿伝説の系譜と展開について考察し、あわせて白猿の出自について考えてみたい。

白猿伝説を記した文献及び白猿伝説に基づいて作られた小説には次のようなものがある。

- 1、後漢、焦延寿「易林」坤之剝
- 2、晋、張華「博物志」
- 3、唐、無名氏「補江総白猿伝」
- 4、宋、徐鉉「稽神録」
- 5、明、洪梗「清平山堂話本」卷三「陳巡檢梅嶺失妻記」（馮夢竜「古今小説」卷二十「陳從善梅嶺失渾家」）



6、明、瞿佑「剪燈新話」卷三「申陽洞記」

7、明、陸粲「説聴」

8、明、凌濛初「初刻拍案驚奇」卷二十四「塩官邑老魔魅色、会骸山大士誅邪」
文献に記された白猿伝説で最も古いものは、後漢の焦延寿の「易林」にみえる、

『南山大獲、盜我媚妾』

の記載である。この短い記載からは、その全貌を知ることができないが、白猿伝説らしきものが既に後漢代に存在していたことを文献の上で辿ることができるのである。

ところが近年になって、四川省から後漢時代の画像石が発掘された。上に挙げた写真がそれである。⁽⁴⁾この画像石は明らかに白猿伝説を描いたものである。左の端に洞窟内にとらわれている女性、次に目を刺さっている猿、男、その従者の姿が生き生きとレリーフに描き出されている。この画像石のもつ意味について考える前に、まず文献上のその後の白猿伝説についてみてみたい。

晋の張華の「博物志」には、「易林」よりも詳しい記載があり、これによって白猿伝説なるものの梗概を知ることができる。その内容をまとめてみると、次のようになる。

- (1) 蜀地方の山に猿形で異常な能力をもったものがある。
 - (2) そばを通る婦人で美人がいますと、奪い去って、その行方は知ることができない。
 - (3) 拉致された婦人が妊娠すると、婦人をもとの家に帰らせる。
 - (4) 生れた子供は人間の姿をしており、成長すると、人と全く変わるところがない。
 - (5) その猿と人間との間に生れた者はみな楊姓を名乗ったので、今も蜀の地方には楊姓の者が多い。
- 蜀は今の四川省である。「易林」にみえた『南山大獲』は、「博物志」にいう『蜀中南高山上、有物似

獼猴、長七尺、能行健走、名曰猴獼」とあるいは同じものではないだろうか。「易林」の『南山』をただちに『蜀中南高山』と断定するのは危険であるが、私は「易林」と「博物志」とに記された白猿伝説、更に画像石に描かれた白猿伝説とはそもそも同一地方に伝えられていたものではなかったかと思っている。「古今圖書集成」職方典五百八十六、成都府山川考、崇慶州の項に、

『多融山在治南、博物志、山有物似獼猴、長七尺、能人行健走、名曰猴獼、一名馮化、何行道婦人美者盜之』

という記載があり、「博物志」にあった『蜀中南高山』は成都府崇慶州の南にある多融山であるといっている。即ち、この記事の記された頃、つまり明末から清初にかけて、多融山が白猿伝説と関連のあることを示す何らかの資料があったことを、この記事は意味しているのである。たとえば白猿伝説が当時、多融山について伝承されていた可能性も存在するのである。そして画像石は実にこの多融山から二十数キロしか離れていない四川省新津で発掘されたのである。しかもその位置は成都の西南に当り、「博物志」の『蜀中南』という記載とも合致することになる。

現代において発掘された後漢時代の画像石と、その画像石の発見された同一地点に、画像石に描かれた伝説の存在を示す資料が清代にあるということは、どのように解釈すればよいのであろうか。同一地点で千数百年もの間、同じ伝説が伝えられていたのでもあろうか。もしそうであるとしたならば、それは民間伝承というものが、いかに根強い生命力をもつものであるかを示す好例といえよう。

「博物志」の記事は、蜀の楊氏に伝わる始祖伝説であったといえる。⁽⁵⁾したがって、物語の重要なテーマは、彼らの祖先が、異常な能力を持つものの子孫だということにある。唐の「補江総白猿伝」もやはり、そこに主眼を置いて創られたフィクションである。「補江総白猿伝」については、欧陽詢の容貌が猿に似ていたのを、彼を嘲笑するために書かれたものだといわれてきた。それは確かに「補江総白猿伝」が書かれる一要因であったにちがいない。しかし、白猿が死ぬ前に、「お前の妻は懐妊しているが、その子を殺すな、その子は将来きっと名を挙げるであろう」と遺言し、物語の最後が、「その子は成長するに至って、果して文学や書を善くし、天下に名前を知られた」というふうに通じているのを見ると、「補江総白猿伝」のテーマが、白猿の子が才能のある人物になるというものであったことを知ることができる。その成立年代の疑問とともに、「補江総白猿伝」が欧陽詢を揶揄する目的で書かれたかどうかはなお疑問

に思われる。

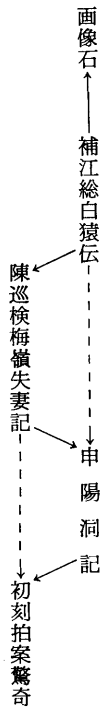
「補江総白猿伝」は「博物志」の記載に基づいて作られたとみられてきた。両者は決して無関係ではないだろう。だが、「博物志」と「補江総白猿伝」とを較べてみると、両者の間に重大な違いのあることが分る。すなわち、「博物志」では女性が子供を宿すと、猿は女性を元の家に送り届けるのに対して、「補江総白猿伝」では白猿を殺して女性を奪い返すのである。その点からみると、「補江総白猿伝」は後漢の画像石に描かれた物語に近いといえる。逆にいえば、画像石の示す物語は「補江総白猿伝」の内容と似ていたのではないかと想像できるのである。しかしながら、「補江総白猿伝」ではさらわれた女性の夫が一人で捜しに行き、白猿の腹を刺して殺すのであるが、画像石では男の他に従者の姿もみえ、しかも男は猿の目を剣のようなもので突き刺しているのである。このようなヴァリエーションがなぜ生じたのであろうか。それを解明するためには、白猿の正体を明らかにせねばならないが、その問題は後まわしにして、更に「補江総白猿伝」についてみてみよう。

「補江総白猿伝」は、唐代伝奇の中でも初期の作品に属するが、同じ初期のものでも、「古鏡記」などと較べてみると、その構成描写ははるかにすぐれており、「古鏡記」が六朝志怪から唐代伝奇への橋渡しとしての役割を果しているならば、「補江総白猿伝」はそれを更に伝奇に近づけたものといえよう。ただ、その構成を劉開榮氏のいうように「白猿伝」の作者の創意とはうけとれない。⁽⁷⁾なぜならば、「補江総白猿伝」において最も生氣にあふれた描写の場面、すなわち白猿を殺す場面が、多少の違いはあるけれども、漢代の画像石にすでにみえているからである。画像石の伝える物語は、「博物志」に載せられているような話とは別に（おそらく「博物志」の方が形態としては古いものであろうが）、「博物志」の記載よりもずっと物語化された、猿を殺すかあるいは目を刺して不具にし、女性を救い出すといったあら筋であったものと想像される。「補江総白猿伝」が民間の伝承に基づくものであろうということは早くから指摘され、その例証として「博物志」が挙げられてきたのであるが、漢代の画像石の発見によって、「補江総白猿伝」に近い形の物語が、唐代よりもはるか以前、漢代にすでに存在していたことが確かめられたのである。

「補江総白猿伝」が世に現われてのちは、この物語は大いにもはやされたりしく、宋代まで単行本のあったことを、「唐書藝文志」

から知ることができる。従って、それ以後の白猿の物語は大体において「補江総白猿伝」の影響を何らかの形で受けていると思われる。たとえば、宋の徐鉉の「稽神録」に載せる話は、場所が異っているだけで、あとは全く「白猿伝」から借用したものである。

宋以後の小説で、「白猿伝」の系統をひくものとしては、「清平山堂話本」巻三の「陳巡検梅嶺失妻記」（これは「古今小説」巻二十に「陳從善梅嶺失渾家」という題で大同小異の内容のものが載っている）、「剪燈新話」巻三の「申陽洞記」、「初刻拍案驚奇」巻二十四の「塩官邑老魔魅色、会骸山大士誅邪」の三つがある。「剪燈新話」は文言で、後の二者は白話の小説である。いずれも、「白猿伝」の直接間接の影響をうけていると思われるのであるが、「陳巡検梅嶺失妻記」は陳巡検が任地に赴く途上で妻を奪われるという点で「白猿伝」の影響下にあり、「申陽洞記」は老猿が申陽侯を名のる点では「陳巡検梅嶺失妻記」の、老猿が男によって殺される点では「白猿伝」の影響をうけている。「初刻拍案驚奇」の話は娘がさらわれて、救い出した若者と結ばれる点では「申陽洞記」の筋を踏襲し、また全体の構成が報応譚になっており、観音菩薩が猿を退治するという点で、同じように道士の法力という超人間的な力をもちだしている「陳巡検梅嶺失妻記」と一脈連なるものを持っている。以上の関係を図にしてみると、次のようになる。



そして画像石と「白猿伝」との間に違いがあったように、それぞれの間にも違いが認められるのである。先ず「補江総白猿伝」と「陳巡検梅嶺失妻記」とを比較すると、大きな違いのあることが分る。通りかかった美しい女性を猿の精が奪い、夫が救い出すという点は同じであるが、「白猿伝」では女性がのちに白猿の子供を生むのに対して、「陳巡検梅嶺失妻記」では、女性が迫害されながら最後まで貞節を守るという筋になっている。それ以後の小説がいずれも白猿の子供を生むという元の伝説の結末と違っている点で、小説

における白猿伝説は、「補江総白猿伝」から「清平山堂話本」に至る過程で大きく変質したといえる。それは「白猿伝」および白猿伝説が本来もっていた重要なテーマを「清平山堂話本」以後の小説が失ったことになる。その理由として、あるいは当時の社会的情況もあげられるかもしれないが、主な理由は小説の作者が人間と異類との婚姻というものに対して実在性を疑うようになったか、嫌悪感を抱くようになったためであろう。白猿伝説を構成していたモチーフは、

(1) 猿の精が女性を奪う

(2) ある男性が猿を殺し、女性を救い出す

(3) 女性は猿の子供を生む

以上の三つで、そのうちの(3)が主要なテーマであった。それが削られてしまうと、(1)か(2)のモチーフを強調するか、もしくは別のテーマをさがすよりほかその作品は文芸として存続しえなかったと思われる。「申陽洞記」は(2)のモチーフが強調されたもの、「陳巡検梅嶺失妻記」と「初刻拍案驚奇」の話は別のテーマに仕立てあげたものである。「申陽洞記」では猿を殺す場面で、おそらく民間の伝説から意趣を借りたものであろうが、猿をだまして仙薬といって毒薬を飲ませ、退治してしまう。その猿の描写には、異常な能力をもった神獣というイメージが稀薄になり、愚鈍な猿のイメージの方が強くなっている。その傾向は「初刻拍案驚奇」になればますますひどくなり、そこに現われる猿は妖術を使うとはいえず、「白猿伝」やあるいは「陳巡検梅嶺失妻記」にあらわれたような威厳のある猿の精とは全く違った好色で低俗な妖怪に成り下ってしまうのである。「申陽洞記」・「初刻拍案驚奇」で、猿に奪われるのが主人公の妻ではなく少女になり、若い男性が救い出してその少女と結ばれるという結末も、本来のテーマ喪失から当然の変化、帰結であるといえよう。「陳巡検梅嶺失妻記」は旅の途中、妻を奪われるというふうには、「白猿伝」に近いものであるが、これも「白猿伝」の主要テーマを失ったため、別のテーマを与えている。それは道術によって魔を伏すというものである。しかも陳巡検の妻が猿の精に奪われるのは、そうなるべく宿命によって決められていたからだと言っている。ここでは、宿命論が、そして道教の優位を説くのがテーマになっているのである。「初刻拍案驚奇」では、さらわれた娘はもともと親が観音菩薩に祈願してえた娘であり、その娘とその親が観音に

祈禱したおかげで、危いところを観音によって助けられ、猿の精は観音に退治されるという報応がテーマとなっている。「陳巡検梅嶺失妻記」が貞節を守り通す女性を描いていたが、「初刻拍案驚奇」ではその点が更に強調されるようになる。そして娘の貞節を強調しようとするために、猿の精はより卑しい性格となり、他の登場人物も精彩を欠くようになる。たとえば、「白猿伝」や「陳巡検梅嶺失妻記」では偶然通りかかった女性を猿の精が奪うのであるが、「申陽洞記」では美人で評判の娘がある夜忽然と部屋から姿を消すというふうになり、「初刻拍案驚奇」では、道士の姿をした猿の精が娘を嫁に貰いたいと出かけてゆき、断わられると「後で後悔するな」と捨てぜりふを残して去り、妖術を使って娘をさらうのである。娘を救い出す若者も、「申陽洞記」では智勇にすぐれた人物に描かれているが、「初刻拍案驚奇」になると、全く付随的な登場人物となってしまう。「陳巡検梅嶺失妻記」では道士の法力によって女性を救い出され「初刻拍案驚奇」では観音菩薩の力によって救われるという筋書きである以上、相手の男性の役割は減少せざるをえないのである。「陳巡検梅嶺失妻記」ではそれが夫であったので、彼の怒りや二人の離別の悲しみ、再会の喜びなどがなお小説に精彩を与えているけれども、「初刻拍案驚奇」になるとそういったものも入る余地がなくなり、猿が退治された後で多勢を率いて山に登って娘を発見し、娘の親から、観音菩薩の力で助かったとはいえ、やはりその若者がいないと娘は山の中で死んでいただろうから、お礼に娘をぜひ嫁に貰ってほしいと懇願される。若者は、自分はそのまんまりでやったのではない、もし娘を貰えば、その下心で助けに行ったに違いないと人から思われるであらう、と言って拒絶すると、それを聞いていた県令がその義気に感心して仲人に立ち、二人がめでたく結ばれるという結末になっている。ここでは、もはや「補江総白猿伝」がもっていたような筋の奇抜さ、表現の力強さというものには微塵も感じられない。娘を蝶がさらっていくという一段も、殊更奇を街ったようで、技巧ばかり目につくようになる。「初刻拍案驚奇」では、世教的な色彩が強くなり唐代伝奇がもっていたロマンティズムを失ってしまうのである。文芸作品における白猿伝説は、唐代伝奇から「清平山堂話本」への間で一度大きく変質したのであったが、「初刻拍案驚奇」に至って更に変質したように思われる。それは、小説を非実在の世界から日常生活の意識の世界までひきずりおろしてしまったということである。「清平山堂話本」、「申陽洞記」、「初刻拍案驚奇」となるに従い、より通俗的、常識的になるのである。それはおそらく、唐代と明代における小説の作者——読

書人の意識の違いによるのであろう。唐代伝奇が社会の規範に対して反抗的なテーマをもっていたのに対し、明代の小説特に後期の短篇小説は社会に迎合するような内容に変わってくるのである。唐代伝奇の作者たちは、古い貴族社会を打破る烽火の一つとして伝奇を社会につきつけたのであったが、明代においては小説の作者は反逆性よりも通俗性を重んじたように考えられるのである。

二

次にこの白猿伝説の主人公である白猿について考えてみよう。先ず、白猿には山神としての性格が認められる。しかもその山土着の土地神ではなく、他の場所から移ってきて、土地神を服従させたもののようである。「補江総白猿伝」には、白猿の出目は語られていない。また、「吾為山神所訴、將得死罪」という言葉はあるが、なぜ山神に訴えられたかは書かれていない。その点を補っているのが、「申陽洞記」である。「申陽洞記」をみると、もと白鼠のいた洞穴を老猴が奪い取ったことが分る。

『然吾等居此、与人無害也。……非若彼之貪淫肆暴、害人禍物。今其稔惡不已、挙族夷滅。蓋亦獲咎於天』

とあるのは、「補江総白猿伝」の『山神所訴、將得死罪』を説明した言葉であろう。また、「陳巡檢梅嶺失妻記」は「白猿伝」の話を道教風に作り直したものであるが、そこでは、千年の修行を積んだ老猿が、麓を通りかかる陳巡檢の妻を奪うために、山神を呼びつけて命令する場面がある。この山神というのは土地神のことであろう。「西遊記」には、こうした土地神の例がみえている。

白猿が山神であると明言した資料はないがこの白猿が山神であることの傍証となる資料はある。その一つは、山神がその山の麓を通りかかる女性を妻にする話である。その話は五岳の一つである華山に集中的に伝えられている。その一つ「逸史」に載せる話は、選人の李主簿なるものが、新婚で華山を通りすぎるとき、妻が廟に入って金天王を拜むと氣を失ってしまう。急いで華仙師という道士にきてもらい、符術を行うと息を吹き返し、妻は金天王が自分をひきとめて帰さなかったのだと語る。他の話もほぼ同様で、「紀聞」に一例、「広異記」には三例みえている。「逸史」以下、いずれも唐代に編纂された書物であり、唐代にこうした話が普及していたであろうということは、敦煌変文の中の「葉浄能詩」に、やはり華山の神が通りかかった張令というものの妻を自分の妻にしようとし、道士

の葉淨能が符術を使って救うという話がみえることから推測できる。

これらの話における華山の神は、金天王、三郎、華山府君とさまざまであるが、三郎というのが「紀聞」と「広異記」とにみえてゐる。華山については、山神が人間の女性を妻にする話の他に、人間の男性が、神女と結ばれる話も伝わっている。「広異記」に二例、「異聞絵録」に一例みえてゐるのであるが、いずれも華山の第三女と結ばれるのである。「広異記」には、また、泰山三郎という泰山の神と人間の女性との話もある。三郎といい、三女というように、神人恋愛の際には、三番目の弟妹であることが重要な意味をもっているようである。それは単に三番目とは限らずに、一番末ということであるかもしれない。末娘である神女と下界の男性とが結ばれる話ならば、唐代伝奇の「柳毅」、民間伝説の「董永伝説」⁽¹⁰⁾がそれぞれ、「柳毅」は竜の小女と、董永は玉皇大帝の第七女と結ばれる話である。そうした例は他にもまだあると思われるが、華山の三郎と、「陳巡検梅嶺失妻記」で、陳巡検の妻を奪う猿の精が、三兄弟の三番目ということには、何らかの関連があるのではないかと思わせる。「陳巡検梅嶺失妻記」では、紫陽真君という道士が、法力で猿の精をとり押えて、陳巡検の妻を救出するのであるが、そのモチーフは「逸史」などの華山の山神の話と同じものである。「陳巡検梅嶺失妻記」は、それまでの白猿伝説と、山神に奪われた女性を道士が法力でとり戻す話とが結びついてできあがった物語であろう。白猿伝説が、山神が女性を妻にする話と容易に結合するのは、そもそも白猿自体が山神であつたからではないかと考えられる。

白猿が山神であることのもう一つの傍証は、画像石の猿が、目を刺されていることである。猿の目を傷つける話は、明の陸采の「説聴」と現代代の民間説話の中にみえてゐる。⁽¹¹⁾「説聴」と民間説話では、猿の目に毒薬や膠を塗つて盲にするが、漢代、明代、現代というふうに、時間と場所を遠く離れたものが、共通する点をもっているということは、そのことが重要な意味をもつものであつたことを暗示していると思われる。そして、この目を傷つけられる猿は、すなわち目を傷つけられる山神の姿ではなかつただろうか。唐の李隠の「瀟湘録」に、そうした山神の話がみえてゐる。

『……老母曰、為我昔日遇北部山神、為物傷目、化身以求我、我以名藥療之、目愈、遂以此馬賜我……』

目を傷つけられる山神とは、つまり一つ目の山神というふうに考えることもできる。⁽¹²⁾このことから、この猿は日本や、中国の古代に

伝えられていた一つ目の山神ではないかと考えるのである。「山海經」では、一つ目の山の怪が「南山經、西山經、北山經、東山經」に、一つ目の人間が「海外西經、海外北經、大荒北經」にみえている。しかし、それらはみな猿形ではなく、白猿の直接の源流とは認めがたい。古代の神話伝説の中で猿形の神をさがすと、甲骨文字にあらわれる夔⁽¹³⁾、帝俊（舜）が一本脚の猿形の神であり、これらは一つ目であると貝塚茂樹氏は述べている。甲骨文字にまで遡ると中国の山神も一つ目一本脚になるようであるが、記録の上では、「山海經」海外西經に一つ目一本脚の馬がみえるだけで、他にはみえていない。文献にみるかぎりでは、猿形で一つ目の山神はみつからず、この画像石はその意味でも興味ある資料である。一方、猿形で一本脚の山神と考えられるものには、夔⁽¹⁴⁾あるいは危⁽¹⁵⁾があり、これは後世の文献にも一本脚の山の怪として屢々現われてくる。そのうちで危は「山海經」によると、崑崙の山にある不死樹を守っている猨⁽¹⁶⁾を殺して、不死の木の実を盗んで天帝に罰せられたという。この危の物語は、蟠桃園にある西王母の桃を盗んだ「西遊記」の孫悟空の物語を連想させる。この危は夔の訛⁽¹⁷⁾ったもので、一つ目一本脚の夔と同一神ともみれるそうであるが、「陳巡檢梅嶺失妻記」の猿の精が齊天大聖と号していることや、花果山の孫悟空が華山の三女を洞穴にとじこめるという伝承があることなどを考えあわせると、危の古代神話と白猿伝説と「西遊記」とはその主人公の猿をめぐって何らかの脈絡があるように思われる。崑崙の不死薬を守っていたものは白猿だという伝承もあり、白猿伝説の白猿の出目はその山神としての性格をみてもさまざまな伝承をその背後にもっているのである。

以上、「白猿伝」の展開および白猿の出目について若干の考察を試みたのであるが、「白猿伝」のもつた民間の白猿伝説はすでに後漢時代に存在し、それが文芸作品となったものが、「補江総白猿伝」以後の諸小説であった。その作品の流れは次第に通俗性を帯びる方向にあったといえる。白猿の出目に關しては、古代神話にまで遡ることができ、その山神としての性格がやや明確になってきたように思われる。このことから、白猿伝説は異類求婚譚の形をとっているが、もとは神人婚姻の物語であろうという可能性を更に強くするのである。

- (1) 汪辟疆「唐人小説」、劉葉秋「古典小説論叢」
- (2) 直江広治氏は「猴娃娘説話」と名づけているが、ここでは「補江総白猿伝」から名をかりて、「白猿伝説」と名づけておく。
- (3) 「中国の民俗学」民間文芸、二、猴娃娘（猿智入り）
- (4) 「中国古文物」（1962 人民美術出版社）p. 238～239
- (5) 「中国の民俗学」p. 19
- (6) 劉開榮「唐代小説研究」第三章、第三節
- (7) 同右、第三章、第四節
- (8) 黄孟文「宋代白話小説研究」第十章（六）陳巡檢梅嶺失妻記の項に、この小説が貞節を堅く守る女主人公を賞讃しているのは、南宋時代には異民族が侵入して婦人を凌辱することが屢々起ったので、暴力に屈しない女性を描くということに特別な意味があったと述べている。
- (9) たとえば、「西遊記」第六十一回には火燄山の土地神が現われている。
- (10) 杜顥陶編「董永沉香合集」所載「新刻董永行孝張七姐下凡陰槐記」
- (11) 「中国の民俗学」p. 18
- (12) 柳田国男「一つ目小僧その他」
- (13) 「神々の誕生」p. 28
- (14) 「玄中記」「博物志」「抱朴子」（太平御覧八八六引）、「広異記」（太平広記四二八引）
- (15) 「山海経」海内西経（「神々の誕生」p. 42 参照）
- (16) 「神々の誕生」p. 44 参照
- (17) 杜顥陶編「董永沉香合集」所載「新出二郎劈山救母全段」
- (18) 傳惜華編「白蛇伝集」所載「遊西湖」、「水門」